

白鹿洞書院と詩跡

はじめに

近年、東アジアの書院史に関する学際的研究は、相当の活況ぶりを呈している。こうした一連の研究は、新たに掘り出された一次史料を駆使して、書院での教科内容、学則（学規）とその影響、ないし建築様式とその配置といった角度から、書院の史の実態に迫り、示唆に富む新知見を数多く披瀝してみせた。これも、いわば伝統教養の角度から、東アジアの伝統的「知」の有り様を再検討する作業の一環にほかならない。¹

ちなみに、儒家の「経学」に代表される伝統教養、東アジアの伝統的学知、その具体的な中身はどうであろうか。これについては、まず房徳隣による簡明な整理をみてみよう。つまり、孔子が修訂したといわれる『六経』（『詩』、『書』、『礼』、『楽』、『易』、『春秋』）、あるいは「六芸」（礼、楽、射、御、書、数）は、その主な内容である。とくに経学は、政治権力による庇護のもと、長い

李

梁

歲月を経て、膨大な知識体系として確立されるようになった。近代風のカテゴリーで分類すれば、それを三つの側面に分けることができる。一つ目は義理の探求のこと、現代の哲学、倫理学に相当する。二つ目は、経書の理解に必須の補助的学科、例えば、言語文字学、文献学、歴史学、天文地理学、数学、などである。三つ目は、経書に言及された各種の学問と技能のこと、などである。総じていえば、経学の知識体系は膨大で複雑なもの、その基本的構造は案外、簡単明瞭である。それは、つまり、「内聖外王」である。経学の知識全般は、そうした「内聖」と「外王」という二つの側面に凝縮され、表象されているといえよう。²

近代まで、東アジア諸国の書院における主たる教学内容は、それぞれ独自色または差異性があったものの、その大枠からみて、そうした伝統的学知の範囲を超えていないとみてよい。中国思想家の岡田武彦がいうように、「朱子は数多くの門弟を育成した

ので、その学派は大いに栄え、宋末、元・明・清を通じて流行したばかりでなく、朝鮮・日本・東南アジアにも伝わって、国々の「教学の中心となった」のである。こうした歴史的事象は、とりわけ『白鹿洞書院揭示』を見做って制定された東アジア諸国の書院の学則からもみてとれる。例えば、江戸前期の朱子学者山崎闇斎（1619-1682）を祖とする崎門学派、朝鮮王朝時代の碩学大儒の李退溪（1501-1570）とその陶山書院は、みな門弟の教育に『揭示』とその精神を高く掲げていることはよく知られている。ただここでは、前述した伝統教養または伝統的学知と書院との関係、とりわけ『白鹿洞書院揭示』と東アジア諸国における書院の展開との関係についての論考は別稿に譲るが、本稿では、主として白鹿洞書院を詠む歴代の幾つかの代表的詩歌にスポットを当て、正確な読解と解釈を通して、白鹿洞書院と詩跡の関係を検証してみたいと思う。

2. 朱熹の学問経歴と白鹿洞書院

朱熹（1137-1200）は、字は元晦、または仲晦、号は晦翁、遯翁などを用いた。南宋の高宗建炎四年（1130）九月十五日、南劍尤溪（現・福建省尤溪县）に生まれる。『宋史』「朱熹伝」に描かれたその神童ぶりからみれば、朱熹は、幼い時から聡明で向学心の強い児童であったということが分かる。

朱熹の学問の経歴は、大体次のように三期に分けられる。すなわち、幼少の時から学識・人格ともに優れる詩人、官僚学者でもあった父朱松（1097-1143）の指導のもと、『孟子』『論語』などの経書を読破し、十四歳の時、父が病死すると、遺言によって、

胡憲・二劉（劉勉之、劉子翬）に師事するまでを第一期とする。二十四歳の時、父の同門であった李侗（延平先生、1093-1163）と出会って「道学」の真髄を悟り、「逃禅帰儒」の契機をつづいたのを第二期とし、さらに四十歳の時、「中庸」未発已発之義が氷解した後を第三期とする。言い換えれば、朱熹は、幼い頃から父および諸名師の教えを親しく受け、さらに日々自らの弛まぬ努力のすえ、トマス・アクィナス（Thomas Aquinas、1225-1274）と比肩しうるほどの世界的大思想家の一人になったのである。

両宋時代、対外的には遼、金、西夏、元といった北方民族との緊張関係が最後まで続いたが、他方では、両宋社会における都会の発展、農工商業の繁栄、とりわけ文治主義による士大夫地位の向上（新興の地主階級の台頭）につれて、中国における書院設立の黄金期を築くことになった。例えば、両宋時代における各種書院の数は、延べ55か所の多きに達した⁷。尤も後になると、書院の多くは単に科挙受験のための予備校と成り下がり、いわば功利主義の学風が国中を蔽っていたというのが実状である。そうした中で、朱熹による白鹿洞書院復興の最大の狙いは、そうした功利主義の学風を退け、正統な儒学の修養と実践によって道徳性・人間性がともに優れた、実務能力のある人材を養成することにあった。

淳熙六年（1179）三月、「秘書郎権知南康軍州事」という肩書で南康軍（現・江西省星子県）に着任した朱熹は、直ちに「知南康軍榜」(『白鹿洞書院古志五種』上、45頁)を頒布し、白鹿洞書院再建の決意を正式に表明した。半年余りの調査と探訪の準備期

をへて、同年「冬の十月、再び白鹿洞書院を建て、翌年の三月、竣工を告ぐ（冬十月、復建白鹿洞書院、次年三月告成）」（『朱熹年譜』）、また「今日幸いにも竣工し、將に同志を率いてその中で講学し、先聖・先師の伝えを用いて太宗皇帝の垂訓に報い、それを發揚したいと思う（今幸訖功、將率同志講学其間、意庶幾乎先聖・先師之傳、用以答揚太宗皇帝之光訓）」（『白鹿洞成告先聖文』、『白鹿洞書院古誌五種』前出）、とみえる。朱子の「尋白鹿洞故址、愛其幽邃、議復興建、感嘆有作」、次卜掌書落成白鹿洞佳句」は、復興の経緯と落成後のその心情を如実に詠った詩句である。

淳熙八年三月、朱熹は、白鹿洞書院再興後の翌年に、南康軍の任を解き、江州（九江）、湖口を通って福建に戻った。こうして、朱熹が直接白鹿洞書院の再興に携わった時間はそれほど長くはなかったが、書院再興の企画、再興後の開学儀式、そして教師の招聘、生徒の募集、課程設置、とりわけ学則（白鹿洞書院揭示）の制定に力を尽くした。なお朱熹は、同じく理学者で老友の呂祖謙（1137-1181）に「書院記」を書いてもらっただけでなく、また、思想的「論敵」でもある陸九淵（象山、1139-1192）を特に書院に招いて、「君子小人喻義利章發論」と題する特別講義を行ってもらったのも特筆すべきことである。¹⁰

このように、白鹿洞書院は、歴史の長さにしても、規模の大きさにしても、必ずしも天下随一とは言えないものの、後世の中国社会のみならず、東アジア諸国の書院設立とその教育思想と実践に与えた影響の大きさは、王昶がすでに指摘したように、正に「為天下書院之首」（『天下書院総志序』）だったのである。これは何よりも、朱子学の体系的思想を凝縮した『白鹿洞書院揭示』お

よびそれによって派生した一連の洞規や教則に負うところが大きい。

3. 白鹿洞書院と詩跡

白鹿洞書院の歴史は、あしかけ千年以上の長きにわたるが、最も影響力を誇った時期は、やはり南宋の淳熙六年、朱熹による白鹿洞書院の復興以後、宋元交替期における一時の中断をへて、明末頃に至るまでの数百年の間であった。ここで詩跡として取り上げる代表的な詩歌を、そうした時期に限定したのもこのためである。

白鹿洞書院に関連する詩歌は、主に前述した『白鹿洞書院古誌五種』に収録された各種の志書、たとえば、李夢陽『白鹿洞書院新志』（明正徳8、1513年刊）、収録詩歌はのべ89首、その中で五言古風詩15首、五言絶句3首、五言律詩6首、七言古風3首、七言絶句14首、七言律詩47首）、鄭庭鵠『白鹿洞志』（明嘉靖33、1554年刊）、収録詩歌はのべ261首、中で五言古詩45首、五言絶句17首、五言律詩61首、七言古風6首、七言絶句67首、七言律詩97首）、周偉『白鹿書院志』（明萬曆20、1592年刊）、収録詩歌はのべ230首、中で五言古風34首、五言絶句12首、五言律詩6首、七言古風32首、七言絶句30首、七言律詩80首）、李応昇『白鹿書院志』（明天啓2、1622年刊）、収録詩歌はのべ133首、中で五言古風26首、五言絶句13首、五言律詩27首、六言詩1首、七言古風10首、七言絶句24首、七言律詩36首、五言排律1首）、および毛德琦『白鹿書院志』（清康熙39、1700年刊）、収録詩歌はのべ202首、中で五言古風46首、五言絶句24首、五言律詩49首、五言排律1首、七言古風13首、七

言絶句の首、七言律詩の首、四言詩の首)の中から朱子をはじめ、宋、明、清代の幾つかの代表的詩歌を精選して正確な読解と注解に努める。賦、銘文、連詩および清以降の近現代の詩歌などは省いた。なお注解にあたって、主として郭斎箋注『朱熹詩詞編年箋注』(上・下、巴蜀書社、2000年)、王懋竑『朱子年譜』を参照し、諸橋『大漢和辞典』および『漢語大詞典』などを随時利用した。詩歌の文字は、主として『白鹿洞書院古志五種』によりつつも、時に作者の別集をも参照した。

まず朱熹の詩をみてみよう。

「尋白鹿洞故址、愛其幽邃、議復興建、感歎有作」(白鹿洞の故址を尋ねて、其の幽邃を愛し、復た興建するを議し、感歎して作有り)

朱熹(南宋)

清冷寒澗水	清冷たり寒澗の水
窈窕青山阿	窈窕たり青山の阿
昔賢有幽尚	昔賢 幽尚有りて
眷言此婆娑	眷言みて 此に婆娑たり
事往今幾時	事往きて 今 幾時ぞ
高軒絶来過	高軒 来り過ぎること絶ゆ
学館空廢址	学館 空しく廢址たり
鳴弦息遺歌	弦を鳴らして 遺歌息む
我来勸相餘	我来りて 勸め相くるの餘
杖策攀緑蘿	杖策を杖いて 緑の蘿を攀る
謀野欣有獲	野に謀りて 獲る有るを欣び

披図知匪訛 図を披きて 訛りに匪ざるを知る

永懷當年盛 永く懷う 当年の盛

莘莘矜佩多 莘莘として 矜佩多かりしを

博約感明恩 博約 明恩に感じ

涵濡熙泰和 涵濡 泰和を熙しむ

淒涼忽荒榛 淒涼として 忽ち荒榛

俯仰驚類波 俯仰して 類波に驚く

發教逮綱紀 教えを發して 綱紀に逮び

喟然心靡它 喟然として 心に它靡し

伐木循陰岡 木を伐りて 陰岡に循り

結屋依陽坡 屋を結びて 陽坡に依る

一朝謝塵濁 一朝 塵濁を謝して

歸哉碩人邁 歸らん哉 碩人の邁なるに

原注：時已疏上尚書、乞洞主矣

本詩は、淳熙六年(一一七九)、白鹿洞書院を復興するために、朱熹自ら白鹿洞書院の廢墟を踏査した時の作。このことは、朱熹の「白鹿洞賦」、「白鹿洞成告先聖文」の中に詳述されている。なお、詩題の「尋」字は、『朱文公文集』巻七によって補った。

【語釈】○寒澗：寒々とした谷川。○窈窕：奥深いさま。○昔賢：昔の賢者。唐代、当地に隱棲・読書した李渤兄弟を指すだろう。○婆娑：逗留する。悠々自適のさま。○高軒：貴顕者の乗る車。一に「高賢」に作る。○学館：白鹿洞書院。○勸相：勧め励まし助けあうようにさせる。『易』井卦の象伝に、「君子は以て民を勞い勸め相く(君子以勞民勸相)」とある。○謀野：野外で相

談する。『左伝』襄公三十一年に「裨諶は能く謀る。野に謀れば則ち獲、邑に謀れば則ち否らず（裨諶能謀、謀於野則獲、謀於邑則否）」とある。○莘莘：数多いさま。○衿佩：若き学徒。『詩経』鄭風「子衿」に、「青青子衿、悠悠我心。…青青子佩、悠悠我思」とあり、毛伝に「青衿、青領也。学子之所服」「佩、佩玉也。士佩瓊珉而青組紱」という。○博約：即ち「博文約礼」、広く学問に励み、礼法を守る意。『論語』雍也篇に「子曰、君子博学於文、約之以礼、亦可以弗畔矣夫」とある。○明恩：賢明な指導・恩恵。○涵濡：うるおう。ここでは涵養の意か。○荒榛：草木が生い茂って荒廢する。○頽波：衰退する趨勢。○喟然：ため息をつくさま。○靡它：他は無い。二心無きことをいう。『詩経』鄘風「柏舟」に、「死に之るまで矢いて它靡し」とある。○循陰岡：丘の北側に沿う。○陽坡：日の当たる山の傾斜地。○謝塵濁：俗世間に別れを告げる。○碩人：有徳の賢人。『詩経』邶風「簡兮」に、「碩人俶俣、公庭萬舞」とあり、毛伝に「碩人、大徳也」という。○邁：くつろぎ、ゆったりした様子、寛大なさま。『詩経』衛風「考槃」に「考槃在阿、碩人之邁」とあり、毛伝に「邁、寛大貌」とみえる。この詩は、目の当たりにした自然の情景に歴史の想いを重ね、かつその対比を通じて、自ら白鹿洞書院の復興、将来隱遁する意向を鮮やかに描いている。

「次下掌書落成白鹿佳句」（下掌書の「落成白鹿」の佳句に次す）
朱熹

重宮舊館喜初成 重ねて舊館を営みて 初めて成るを喜び

要共群賢聽鹿鳴 群賢と共に 鹿鳴を聴くを要む
三爵何妨奠蘋藻 三爵 何ぞ蘋藻を奠うるを妨げん
一編詎敢讓明誠 一編 詎ぞ敢えて明誠を讓せん
深源定自閑中得 深源は 定す閑中より得
妙用元從樂處生 妙用は 元と樂處より生ず
莫問無窮庵外事 問う莫れ 無窮の 庵外の事を
此心聊與此山盟 此の心は 聊か此の山と盟わん

本詩は、白鹿洞書院が落成した後、朱熹がより一層読書と涵養に励むことを詠んだ七言律詩。下掌書は、朱熹によって書院の庶務担当者として招かれた南康（現・江西省星子県）の居士。彼の作った七律詩に次韻したのである。

【語釈】○聽鹿鳴：昔、白鹿が飼われていたところで読書講学することを言う。○三爵：三杯の酒。爵は古代の酒器。酒杯。『詩経』大雅「行葦」に「或いは獻じ或いは酔い、爵を洗い罍を奠く」とある。○蘋藻：二種の水草。古代の人々はよくそれを使って祭祀に用いたことから、後に広く祭祀品を指すようになった。『詩経』召南「采蘋」に「于以采蘋、南澗之濱。于以采蘋、于彼行潦」とみえる。○一編：一部の書。○明誠：『大学』における「明明徳」と「誠其意」のこと。明とは主として外事外功、つまり格物致知、読書講学のことを指し、誠とは内面の工夫涵養、つまり正心誠意、涵養体験のことを指す。「白鹿洞賦」に「明誠其兩進、抑敬義其偕立」とある。○深源：深遠な根源。○妙用：絶妙な働き、作用。○聊：ひとまず。とりあえず。

「白鹿講会次下文韻」（白鹿の講会にて下文の韻に次す）

朱熹

宮墻蕪沒幾經年 宮墻蕪沒して 幾たびか年を経たる

祇有寒煙鎖澗泉 祇だ寒煙有りて 澗泉を鎖す

結屋幸容追舊觀 屋を結びて 幸いに舊觀を追うのを容すも

題名未許續遺篇 名を題して 未だ遺篇を續ぐを許さず

原注：請為洞主不報

青雲白石聊同趣 青雲 白石は 聊か趣を同じうするも

原注：謂西澗劉公

霽月光風更別傳 霽月 光風は 更に傳を別つ

原注：謂濂溪夫子

珍重箇中無限樂 箇中の無限の樂しみを珍重す

諸郎莫苦羨騰鸞 諸郎 苦だ騰鸞を羨やむ莫れ

本詩は、上述の「次卜掌書落成白鹿佳句」に繼いで作られた一首である。詩の原注に見える「請為洞主不報」に関して、朱熹が朝廷に対して「請為洞主」（白鹿洞書院の山長を招聘すること）したのは淳熙七年の春のことであり、『文集』卷二六「與丞相別紙」、「與丞相劄子」の中にみえる。この詩は、学徒衆に向かつて劉渙や周敦頤に見習って、山林に安住し、修身涵養を行い、ひたすら功名を追い求めないよう諭している。なお、『朱子可聞詩集』卷四に、「西澗・濂溪、皆白鹿書院近地、昔有周夫子・劉公在焉。一則正學可師、一則高風可仰。箇中有無限真樂、學者宜珍重自修、莫徒羨功名以自苦也」とある。劉渙（1000～1080）、字は凝之、

西澗居士と号した。仁宗の天聖八年（1030）の進士、筠州（江西高安）の人。剛直清廉な性格で、たびたび上官に逆らい、五十歳で致仕して、南康に隱居を余儀なくされた。劉渙の道德人格を廬山の高きに譬えた歐陽脩（1007～1072）の「廬山高、贈同年劉中允歸南康」は、広く知られている。なお、南宋の劉元高（1220?～1275?）は、『三劉家集』（劉渙、劉恕（1032～1078）、劉義仲（1059～1120））の遺文を輯録して公刊した。現存する唯一の版は『四庫全書』（上海古籍出版社影文淵閣本、1987年、集部総集類第135冊、533頁）に収録されている。周敦頤（1017～1073）、字は茂叔、濂溪と号した。『太極図説』、『通書』を著わし、朱熹によって理学の開山と見なされている。

【語釈】○講会：學術論弁の集會。○宮墻蕪沒：白鹿洞書院の扉が雜草の中に埋もれる。○寒煙：寒々としたモヤ。○鎖澗泉：鎖は「鎖」と同意。ここでは、包みおおう、深く立ちこめる意。澗泉は澗水。○西澗劉公：劉渙を指す。○濂溪夫子：周敦頤を指す。「霽月光風、晴夜皓月、晴日和風」などは、みな黃庭堅による周敦頤への賛辭である。○箇中：ここ。「此中」と同意。○騰鸞：飛び上がる意。ここでは仕官して出世する意。

「白鹿洞獨對亭」（白鹿洞の獨對亭）

王守仁（明）

五老隔青冥 五老は 青冥を隔てて
尋常不易見 尋常に 見易からず
我來騎白鹿 我來りて 白鹿に騎り
凌空陟飛巖 空を凌いで 飛巖に陟る

長風卷浮雲 長風 浮雲を巻き

褰帷始窺面 帷を褰げて 始めて面を窺う

一笑仍舊顏 仍お舊顏なるに一笑し

媿我鬢先變 我が鬢 先ず變ぜしを媿つ

我來爾為主 我來れば 爾 主を為り

乾坤亦郵傳 乾坤は 亦た郵傳なり

海燈照孤月 海燈 孤月に照り

靜對有餘眷 靜かに對えば 餘眷有り

彭蠡浮一觴 彭蠡に 一觴を浮かべ

賓主聊酬勸 賓主 聊か酬勸せん

悠悠萬古心 悠悠たり 萬古の心

默契可無辨 默契して 辨無かる可し

本詩は、欽定四庫全書『江西通志』卷一四九には、「獨對亭望五老」(獨對亭にて五老を望む)と題し、『白鹿洞書院古志五種』には、「登獨對亭望五老」(獨對亭に登りて五老を望む)と題する。詩の文字は『王陽明全集』(吳光ほか編校、上海古籍出版社、二〇一一年)による。四部叢刊にも所収。

【語釈】○五老：廬山の東南部に位置する名峰の名。海拔一三五八メートル。五老峰の名は、断崖が切り立ち、五人の老人が連れだつて並ぶように見えることによる(『太平寰宇記』一一一)。白鹿洞書院はその南(東南)約四キロに位置する。

李夢陽「獨對亭銘」(『空同集』卷六十、四庫全書本)によれば、獨對亭は、白鹿洞書院の東、枕流橋の北の断崖上にあり、かつて朱熹が遊んだ場所、という。明、邵寶「獨對亭記」(『容春堂前集』

卷一二、四庫全書本)に、「弘治辛酉(一四四年、一五〇一年)夏六月、(邵)寶奉詔視學、至南康白鹿書院。是院也、勝在五老、聞於四方、乃負而弗鄉。雖無大閼繫、然亦若缺典者。故周覽之餘、欲為亭以對之、屬時暑雨、未暇相度。蓋越一年而後再至、步自南岡、歷於東厓、得地丈餘。其平如砥、其崇如壇。仰而西望、五老當前、若拱若揖、若陟若降、若在咫尺可延致與語者。竊意、亭宜於此。諸生從者曰、此文公(朱熹)先生舊遊也。俯觀崖石、有風泉雲壑四字。寶乃欣然喜曰、此先得吾意乎。不於此亭、烏乎為宜。雖然、五老之勝、有目者共觀、而非公(朱熹)莫之能當。故以獨對名亭、重公迹也。」とみえる。

なお、李夢陽「獨對亭銘」に、「獨對亭者、白鹿洞書院亭也。亭在書院東枕流橋北岨上、朱子舊遊處也。其下則峻溪湍灘衝擬、乃其岨下広而上砥、陟亭西向、適與五老峰對。又岨間劔風泉雲壑字、大如斗、亦西向。故曰獨對。云獨對者、前副使提學無錫邵公(邵宝)所名也。詳見其所自記」とある。

王守仁(陽明と号す、1472～1529)は、正徳十四年(1519)、朱宸濠による「寧王の乱」を平定したのち、軍勢の一部を南康に駐屯させ、さらに翌年の正月、開先寺(現在、秀峰寺と改名)にある李璟讀書台傍らの岩壁に、自らの軍事的功績を刻んで記した。その後また、白鹿洞書院に足を運び、朱熹の古本『大学』『中庸』に「求正」という碑文を作って残した。『陽明年譜』に「徘徊久之、多所題識」とあるのは、当時の情景を伝えている。なお、正徳十六年(1521)六月、王守仁は、門人達に呼びかけて白鹿洞書院で講学した。五言古詩「白鹿洞獨對亭」は、この時の作である。『王陽明全集』の目録によれば、正徳十四年の作である、という。¹¹⁾

○青冥：青空。○尋常：いつも。○飛巖：高い峰。○卷：巻き上げる。○面：容姿。○舊顔：昔のままの容姿。○乾坤：天地。○郵傳：宿屋、駅館。○餘眷：豊かな愛顧。○彭蠡：鄱陽湖。○酬勸：酒を勧めあう。○萬古：永遠。○默契：言葉を交わさずに心が通じあう。○辨：区別。

王守仁の詩は、後に唐龍、朱節、陳洪模、舒芬、鄒守益、鄒元標、翟鳳翥など、多くの詩人騷客たちの次韻詩を生んだ。その中で、明の鄒元標の詩を取りあげてみてみよう。

「獨對亭書懷、次王陽明先生韻」（獨對亭にて懐いを書し、王陽明先生の韻に次す）

幾從江上過	幾たびか江上より過ぎ
危峰坐中見	危峰 坐中に見ゆ
清秋披蒙茸	清秋 蒙茸を披き
始得陟崇巘	始めて崇巘に陟るを得たり
諸賢聚一堂	諸賢 一堂に聚まり
圖書已識面	圖書にて 已に面を識れり
憶昔迷岐路	憶う昔 岐路に迷い
困衡不善變	困衡して 善く變ぜず
博文并格物	文に博くして 並びに物を格し
留情經與傳	情を 經と傳とに留めり
於今兩眞之	今に於いて 兩つながら之を眞き
深荷聖衷眷	深く聖衷の眷を荷う
古人棄糟粕	古人は 糟粕を棄て

用為來者勸 用て來者の為に勸む
素琴本無絃 素琴は 本と絃無し
了心何足辯 心に了れば 何ぞ辯ずるに足らん

本詩の文字は、欽定四庫全書『願学集』巻一による。前掲の毛德琦編『白鹿書院志』には、単に「次陽明韻」（陽明の韻に次す）と題する。

作者の鄒元標（1551～1624）は、字は爾瞻、南皋と号した。江西吉水の人。萬曆15年（1577）の進士、明東林党の首領の一人であり、趙南星（1550～1627）、顧憲成（1550～1612）とともに「三君」と称せられる。かつて吉水書院、京師首善書院を開いて、馮從吾（1557～1627）とともに講学を行い、数多くの弟子を教えた。著書に『願学集』8巻、『太平山居疏稿』4巻、『日新篇』2巻、『仁文会語』4巻、『礼記正義』6巻、『四書講義』2巻、『工書選要』11巻および『鄒南皋語義合編』4巻などがある。

鄒元標は、たびたび星子に赴いて、白鹿洞書院を訪ねていた。毛德琦編『白鹿書院志』には、本詩以外に、五言絶句3首、七言絶句1首を収録する。

【語釈】○危峰：高峻な峰。○蒙茸：草木の茂み。○崇巘：高い峰。○困衡：苦悩する。『孟子』告子下に「心に苦しみ、慮おもんばかりに衡よだかわる（困於心、衡於慮）」と見え、心が苦しみ考えがあまりる意。○博文：広く文献を学ぶ。○傳：注釈。○聖衷：聖人の心。○來者：将来の人、後輩。○素琴本無絃：『晋書』卷九四、隱逸伝、陶潜の条に、「性不解音、而畜素琴一張、絃徽不具。每朋酒之會、則撫而和之、曰「但識琴中趣、何勞絃上聲」とある。○辯：区

別する。

「甲子初秋訪白鹿洞」（甲子の初秋、白鹿洞を訪ぬ）

湛若水（明）

十畝堂開旧典型　十畝の堂は　旧き典型を開き
 當年白鹿也來迎　當年　白鹿も　也た來迎す
 群山靡靡水争出　群山靡靡として　水争い出で
 獨樹荒荒鳥自鳴　獨樹荒荒として　鳥自から鳴く
 煙散香爐浮俎豆　煙は香爐より散じて　俎豆に浮かび
 苔生漱石上檐楹　苔は漱石に生じて　檐楹に上る
 廢興只有人心在　廢興は　只だ人心の在る有りて
 五百年來拜後生　五百年來　後生拜せり

本詩の作者で、明の代表的理学家の一人である湛若水（1466～1560）は、『明儒学案』や『明史』湛若水伝などによれば、「字は元明、甘泉と号す。広東増城の人、（陳）白沙に従い学ぶ」とあり、弘治十八年（1505）に進士及第、かつて王陽明とともに講学を行って「相心相」とし、また「『心性図説』を作って以て士を教え」、「生平至る所、必ず書院を建てて以て（陳）献章を祀る」という。後に国子祭酒（国子監の長官または大学頭）となる。生涯中に二度、白鹿洞書院を訪ねた。本詩「甲子（弘治十七年（一五〇四）の初秋　白鹿洞を訪ぬ）」は、進士に及第する一年前に、初めて白鹿洞書院を訪ねた時の七言律詩。上掲の王守仁の詩よりも十五年早く作られた。嘉靖十五年（1536）、湛は多く

の生徒を率いて、再び白鹿洞書院を訪ね、「丙申再訪白鹿洞五首」を残した。更に嘉靖十七年、江西参政、嘉靖八才子（李開先1502～1568、趙時春1509～1567、唐順之1507～1560、陳東、熊過、任瀚1502～1592、呂高1544～?など）のリーダー格の王慎中（字は道思、遵岩居士、南江と号す。1509～1559）の求めに応じて、『心性総箴二図説』を書きあげ、それを石碑に刻んで白鹿洞書院に残している。

【語釈】○十畝堂：白鹿洞書院を指す。○典型：守るべき法則。○白鹿：唐の李渤は、ここに隱棲・読書し、白い鹿を飼って楽しんでたという。○靡靡：連なつて切れないさま。○荒荒：ひっそりとわびしいさま。○俎豆：供物を盛る祭具。○漱石：名勝の名。白鹿洞書院（百度百科）の条にいう、「白鹿洞書院坐落在貫道溪旁、有櫺星門、泮池、礼聖門、礼聖殿、朱子祠、白鹿洞、御書閣等主要建筑。：在櫺星門西北隅、不僅有曲徑通幽、山石林泉之美、而且還有釣磯石・漱石・鹿眠場・流杯池諸勝迹。在漱石和流杯池上、均因有朱熹手書漱石・流杯池石刻而得名」と。○檐楹：白鹿洞書院の、ひさしの下にある前柱のこと。○後生：後進。

「始至白鹿洞」（始めて白鹿洞に至る）

李夢陽（明）

曠哉超世志　曠なる哉　超世の志
 緬邈平生思　緬邈たり　平生の思い
 鬱壹眷名跡　鬱壹として　名跡を眷みて
 久注匡山睡　久しく匡山の睡に注ぐ
 南涉枉嘉命　南に涉りて　嘉命を枉げ

果諧夙所期 果たして夙に期する所に諧えり

仲秋巖壑清 仲秋 巖壑清らかにして

宮館復在茲 宮館は 復た茲に在り

白石激寒湍 白石 寒湍に激し

巖蘿裊空基 巖蘿 空基に裊く

黯傷逝者往 黯に逝く者の往くを傷む

密慚來者追 密かに來る者の追うに慚づ

性同道豈隔 性同じければ 道は豈に隔たんや

途異理空悲 途異なれば 理は空しく悲しむ

興言懷昔賢 興言に 昔賢を懷い

日竟眺前岐 日竟りて 前岐を眺む

榛荒徒鬱紆 榛荒 徒らに鬱紆たり

林崦一何深 林崦 一に何ぞ深き

感情匪哀歎 感情は 哀歎に匪ず

聊詠昭言垂 聊か詠じ 言を昭らかにして垂れん

本詩（五言古詩）の作者、李夢陽（1472～1529）は、別名獻吉、字は恩賜、空同子と号した。甘肅慶陽の人。弘治六年（1493）の進士。正徳六年より同九年（1511～1514）まで、江西提学副使となる。彼は在任中、白鹿洞書院を再三訪ねて、みずから講学を行ひ、かつ書院の経営を立て直して、新たに『白鹿洞新志』を修めた。いわば書院の整備充実のみならず、明の中期、江西の文教事業の發展全般に多大な貢献を為したのである。後に「寧王の乱」に連座して一時入獄されたが、八方からの救援のお蔭で、免官帰郷を許された。

著名な文学者・書道家として李夢陽は、白鹿洞書院に関して相当数の文章、詩歌、筆跡を残した。ここで選んだ彼の二首の詩をも含めて、みな彼の別集『空同集』および前掲の志書に収録されている。

【語釈】○曠：広大なさま。○緬邈：長く久しい間、はるかに遠いさま。唐の張説「遊洞庭湖湘」詩に、「緬邈洞庭岫、葱蒙水霧色」とある。○鬱壹：心が結ばれる、憂悶する。○眷名跡：歴史のある名高い場所を思慕する。○久注：長い間、関心を抱き続けた。○匡山：廬山の別名。周の時、匡氏の七人兄弟がここに廬を結んで隠棲し、後に登仙したという伝説により、匡山・匡廬とも呼ばれるようになった。○枉嘉命：かたじけなくもよき官職を授けられる。○巖壑：山や谷。○宮館：ここでは白鹿洞書院を指す。○空基：荒廃した建物の址。○寒湍：冷たい早瀬。○巖蘿：山に生えるツタ。○榛荒：雑草の生える地。○鬱紆：曲がりくねるさま。○林崦：林や山。

「白鹿洞別諸生」（白鹿洞にて諸生に別る） 李夢陽

東南自有匡廬山 東南に 自から匡廬山有り
遂與天地增藩衛 遂に天地の與に藩衛を増す
山根插入彭蠡湖 山根は 彭蠡湖に挿入し
崢嶸背殺三江勢 崢嶸として 三江の勢いを背殺す
地因人勝古有語 地 人に因つて勝るは 古え語有り
於乎萬物隨興廢 於乎 萬物は興廢に隨う
学館琳宮客不棲 学館 琳宮に 客棲まず

千巖萬壑堪流涕 千巖 萬壑は 涕を流すに堪えたり
 文采昔賢今尚存 文采の昔賢 今 尚お存するも
 講堂寂寞對松門 講堂は寂寞として 松門に對う
 松門桂華秋月圓 松門の桂華 秋月圓かにして
 拄杖高尋萬古源 杖を拄いて 高く万古の源を尋ぬ
 梅嶺古色照石鏡 梅嶺の古色 石鏡を照らし
 扶桑丹霞迎我軒 扶桑の丹霞 我が軒を迎う
 絶頂坐歌霜月淨 絶頂にて坐るに歌えば 霜月淨らかに
 石潭洗足芝草繁 石潭にて足を洗えば 芝草繁し
 更有冠者五六人 更に冠者有り 五六人
 峭崖窮嶂同攀攀 峭崖 窮嶂 同に攀攀す
 草行有時間過虎 草に行けば 時有りて過虎を聞き
 且暮時復啼清猿 且暮 時に復た 清猿啼く
 我今胡為公務牽 我 今 胡為れぞ公務に牽かるや
 蟋蟀在戸難久延 蟋蟀 戸に在れば 久しく延べ難し
 出山車馬走相送 山を出づるに 車馬走つて相送り
 落日遂上鄱陽船 落日は 遂に鄱陽の船に上る
 生徒綵戀集涯澗 生徒は綵戀して 涯澗に集まり
 孤帆月照仍留連 孤帆 月照りて 仍お留連す
 情深過厚亦其禮 情深くして過厚なるも 亦た其の礼
 謏薄竊愧勞諸賢 謏薄 竊かに諸賢を勞するを愧づ
 明朝伐鼓凌浩蕩 明朝 鼓を伐ちて 浩蕩を凌げば
 五峰雙劍生秋煙 五峰 雙劍に 秋煙生ぜん

【語釈】○匡廬山…廬山の別名。○藩衛…守り。○山根…山麓。

○彭蠡湖…鄱陽湖の古名。○崢嶸…高峻なさま。○背殺…はずしそぐ。○三江…最も著名な用例は『尚書』禹貢篇の「三江既入、震沢底定(三江がすでに海に流れ込み、震沢も安定するようになった)」である。これは古代における長江下流域の治水について記したものと考えられるが、以下の諸説がある。①長江中流域の贛江・漢江・岷江を指す(『初学記』に引く鄭玄の説など)、②長江の下流部が三つに分かれていたとするもの(『漢書』地理志など)、③江蘇省の太湖以東、長江デルタ先端部にあった主要な水流を指す(『呉地記』など)、④長江以外に錢塘江や浦陽江が含まれるとするもの(『国語』韋昭注など)。詳しくは『世界大百科事典』(第二版)参照。南朝宋の謝靈運「入彭蠡湖口」詩に「三江事多往、九派理空存」とある。○於乎…感嘆詞。○琳宮…仙宮、道観。○文采昔賢…輝かしい昔の賢者。○桂華…モクセイの花。○萬古源…永遠の根源。○梅嶺…大庾嶺を指す。江西省と広東省との境にある山で、古来、交通の要衝である。梅の樹が多いため、梅嶺とも称された。唐の杜甫「哭李常侍嶧」二首其一に、「短日行梅嶺、寒山落桂林」とある。○扶桑…太陽の出るところと伝え、ここでは太陽の代称。○丹霞…虹垂天」とある。○石潭…岩に囲まれた深い水。○芝草…瑞草の靈芝。○冠者…成年に達した若者。○峭崖窮嶂…険しい断崖と荒れはてた峰。○草行…草原を進む。○蟋蟀在戸…こおろぎが戸口にいる。晩秋の情景である。『詩経』豳風「七月」に「七月 野に在り、八月 宇に在り。九月 戸に在り、十月 蟋蟀 我が牀の下に入る」とある。○鄱陽…鄱陽湖。○綵戀…思慕して分かれがたい、名残惜しむ。○涯澗…水辺。○謏薄…浅

薄」と同意。自己の謙称。○浩浩：広々とした水面。○五峰：五老峰。○雙劍：廬山の雙劍峰。○秋煙：秋のもや（煙霧）。

「初入五老峰、謁白鹿洞、呈湯佐平先生」（初めて五老峰に入り、白鹿洞に謁して、湯佐平先生に呈す）
王士禛（清）

忽忽遠城市	忽忽として	城市に遠ざかり
浩浩臨滄洲	浩浩として	滄洲に臨む
良辰愜奇賞	良辰	奇賞を愜しみ
始遂廬山遊	始めて廬山の遊を遂げり	
威紆屢轉壑	威紆として	屢ば壑を轉り
窈窕時經邱	窈窕として	時に邱を經たり
潺潺風瀑瀉	潺潺として	風瀑瀉ぎ
蒼蒼石川流	蒼蒼として	石川流る
騎牛緬往跡	騎牛	往跡緬かにして
眠鹿欽前修	眠鹿	前修を欽う
風景宛猶昔	風景	宛も猶お昔のごとく
年運倏已適	年運	倏ち已に適く
惟有五老峰	惟だ五老峰有り	
屹立忘春秋	屹立して	春秋を忘る
紫芝驚漢帝	紫芝	漢帝を驚かし
黃石招留侯	黃石	留侯を招く
泉石不我遐	泉石	我を遐げけずんば
桂樹生山幽	桂樹	山幽に生ぜしめよ

本詩の作者、王士禛（1634～1711）は、字は貽上、阮亭または漁洋山人と号した。山東新城の人。順治5年（1648）の進士。揚州司理から侍読に進み、刑部尚書に至った。21才の若さで詠んだ「秋柳」詩によって一躍全国的な名声を博し、朱彝尊（1629～1709）とともに、「南朱北王」と併称されたほどである。「神韻説」を唱えて、清朝の詩壇に多大な影響を及ぼしただけでなく、自身も数千首に上る膨大な数の詩歌を残した。著書に『帶經堂集』32卷、『漁洋山人精華錄』12卷などある。王士禛は、清の康熙二三年（一六八四）、南海神廟に祭告する命を受けてその翌二十四年二月に、広州に着いて南海神廟で祭告の儀を済ませた。その帰途、天候に阻まれて江西の南康に滞留したとき、当時、白鹿洞書院山長の湯来賀、南康の太守周燦、それに孫枝蔚とともに、白鹿洞や棲賢寺に遊び、五老峰を望み、三峡、玉淵などの諸名勝を楽しみ、数首の詩歌を残した。この詩は、白鹿洞に遊び、文会堂で湯来賀と面会した後、本詩を作る。蒋寅『王漁洋事迹徵略』（人民文学出版社、二〇〇一年）参照。

詩題の湯佐平は、湯来賀（1607～1688）のこと、元の名は湯来肇で、字は佐平、またの字は念平、惕庵・主一山人と号した。江西南豊の人。「幼承家学、淹貫古今、博文為豫章之冠」とい、「南斗先生」と称せられた。崇禎十三年（1640）の進士、揚州推官となる。後に兵部侍郎兼広東巡撫に進み、為政は公正廉潔として知られる一方、明末清初期における散文家、詩人としても広く知られた。南明滅亡の後、湯来賀は古里に隠居して著述に専念した。『鹿洞邇言』、『広陵敬慎録』12卷、『広陵欽恤録』12卷、『評点字孟字』2卷、『評校政治尽心録』20卷、『内省齋文集』32卷、『広陵粵東政

備」一巻など、数多くの著書を残した。

ちなみに、本詩が作成された前年（康熙二三年）、湯來賀は江西巡撫の安世鼎に招かれて、白鹿洞書院の院主となっていた。

【語釈】○城市：大きな町。ここでは南康府星子県城を指す。

○浩浩：広大なさま。○忽忽：見る間に、すみやかに。○滄洲：水に臨む地。しばしば名利の場を離れた隠者の住む場所を指し、ここでは豊かな自然に富む地をいう。南朝斉の謝朓「之宣城、出新林浦、向版橋」詩に、「既歎懷祿情、復協滄洲趣」とある。唐の杜甫「曲江對酒」詩に、「吏情更覺滄洲遠、老大悲傷未拂衣」とある。○奇賞：非凡な風景を愛で楽しむこと。○良辰：すばらしい時節。○威紆：長々と曲がつて続くさま。○窈窕：奥深いさま。○潺湲：ここでは流れ落ちる水音の形容。○風瀑：風中の瀑布。○石川：岩間の谷川。○騎牛：『方輿勝覽』一七に、「青牛谷、在五老峰下。九江錄、昔有道士洪志、乘青牛、得道于此」とある。唐の楊衡「宿青牛谷」詩に「隨雲步入青牛谷、青牛道士留我宿」という。○眠鹿：明の李夢陽「遊廬山記」によれば、白鹿洞書院の傍らに眠鹿場があった。○前修：昔の県人。ここでは当地に隱遁・讀書した李渤兄弟をいう。○年運：年運：めぐり行く歲月。○適：過ぎ去る。尽きる。○忘春秋：歲月の推移を忘れて変化しない。○紫芝：靈芝、一種の仙草。秦末漢初、商山に隱棲した四皓（東園公、夏黃公、用里先生、綺里季）が、漢の高祖劉邦の招きに応ぜず、かつて「曄曄たる紫芝、以て飢えを療やす可し」云々の「紫芝曲」（「採芝操」）を作った。唐の李商隱「四皓廟」詩に、「本為留侯慕赤松、漢庭方識紫芝翁」とある。○黄石：秦の隱士、黄石公のこと。生没年不詳。前漢初期の政治家・軍師で、後に留侯

に封じられた張良（字は子房）に、兵書を与えたという伝説で名高い。『史記』留侯世家にみえる。○泉石：山水自然。ここでは廬山のそれ。○桂樹生山幽：『楚辭』に収める淮南小山の「招隱士」に、「桂樹叢生兮、山之幽」とあり、後漢の王逸は下の句に「遠去朝廷而隱藏也」と注する。桂樹（香木）が山の奥深い処の生えるように、この山に隱棲したい希望を表白する。

なお橋本循『王漁洋』（集英社、漢詩大系、一九六五年）には、本詩の訳注を収める。

終わりに代えて

名詩と場所—この詩跡としての二大要件に照らしてみれば、以上、試みに選んだ詩は、必ずしもそれにぴたり当てはまるとは限らない。あえていえば、ここでは、寧ろ名人と場所という要件に傾いている嫌いがないでもない。無論、名人であつても直ちにその詩が名詩であるという保証はない。たとえ朱熹の詩でも必ずしもみな名詩とは限らない。事実、朱熹をはじめ、奔放な感情をストレートに詠う唐詩に比べて、宋・明期の詩歌は、叙述的で理屈っぽさが際立つ。こうした事情を勘案して、白鹿洞書院にまつわる詩歌の詩跡は、詩歌の精選、正確な読解と注解など、まだ多大な作業を必要とする。なお時間的制限、とくに勉強不足のため、詩作の年代や背景資料なども含めて、まだまだ精査して解明すべき点が数多く残っている。これらはいずれも、さらなる研鑽と究明を行うべき今後の課題としておきたいと思う。

主な参考文献

- 1、青木正児ほか編『漢詩大系』全54巻、集英社、昭和四十年。
- 2、吉川幸次郎、小川環樹編集・校閲、高橋和巳注『王士禛』中国詩人選集二集23、岩波書店、昭和三十七年。
- 3、岡田武彦解題、佐藤仁索引『校点朱子大全』上下、書光学術資料社。
- 4、王雲五主編『晦庵先生文集』（1-6、7-13）、四部叢刊三編、台湾商務印書館。
- 5、『四書章句集注』新編諸子集成（第一輯）、中華書局、1983年。
- 6、黎靖徳編、王星賢点校『朱子語類』（1-8冊）、中華書局、1994年。
- 7、王懋竑撰、何忠禮点校『朱子年譜』年譜叢刊、中華書局、1998年。
- 8、莫礪峰『朱熹文学研究』、南京大学出版社、2000年。
- 9、袁行霈ほか著『中国詩学通論』安徽教育出版社、1994年。
- 10、孫家驊ほか編『千年学府—白鹿洞書院』江西人民出版社、2003年。
- 11、李才棟編著『白鹿洞書院史略』教育科学出版社、1989年。
- 12、宋元文学研究会編『朱子絶句全譯注』汲古書院、平成三年。

謝辞

本研究は、JSPS科研費222320067、23520093の助成を受けたものです。

本稿は、上述植木科研究会（2013年9月4日、於弘前大学）での口頭報告レジュメに対して大幅なデータを追加して再構成したものである。なお、口頭報告の際、植木久行教授をはじめ、松尾幸忠教授（岐阜大学）、許山秀樹教授（静岡大学）からご指摘と

ご教示、また文献資料のご提供を頂き、記して感謝の意を表する。とりわけ、専門外の筆者を二度も科学研究費補助金基盤研究（B）の研究グループ（上述のほか、平成十七年度—平成十九年度、科研費基盤研究（B）「詩跡（歌枕）」研究による中国文学史論再構築—詩跡の概念・機能・形成に関する研究」、いずれも代表者は植木久行）に参加させていただいた植木久行教授に深甚なる謝意を表したい。

註

- 1 例えば、吾妻重二編『泊園記念会 創立60周年記念論文集』（関西大学東西学術研究所国際共同研究シリーズ）、関西大学出版部、平成23年10月）、関西大学東西学術研究所編『東西学術研究所創立六十周年記念論文集』（関西大学出版部、平成23年10月）、科学研究費補助金基盤研究（A）「東アジアにおける伝統教養の形成と展開に関する学際的研究—書院、私塾教育を中心に」（代表吾妻重二）、大阪大学懷徳堂研究センター編『懷徳堂研究』シリーズなどに所載される一連の論考は、それを表わしている。
- 2 房徳隣「西学東漸与経学的終結」『明清論叢』第二輯、紫禁城出版社、2001年4月。
- 3 岡田武彦『宋明哲学の本質』、木耳社、昭和59年11月、147頁。
- 4 代表的数点を挙げれば、大久保英子『明清時代書院の研究』、国書刊行会、昭和52年3月、鄧洪波『中国書院史』、中国図書出版集団 東方出版中心、2004年。朝鮮・日本への影響については、347-363頁、516-535頁・李弘祺『宋代官学教育与科举』、台北聯経出版社、1993年；関山邦宏『白鹿洞書院揭示』の諸藩校への定着とその実態』、青山学院大学教育学会『教育研究』第21号、1997年3月；沖田行司『近世儒学教育理念の形成—山崎闇斎と白鹿洞書院揭示』、同志社大学文化学会『文化學年報』第二十六輯、同氏『藩校・私塾の思想と教育』（日本武道館、平成23年）；柴田篤『白鹿洞書院揭示』と李退溪』『哲学年報』第21号、

2003年6月。同氏「白鹿洞書院揭示」と江戸儒学」『中村璋八博士古稀記念東洋学論集』、汲古書院、1996年；湯浅邦弘「懷徳堂と白鹿洞書院」、懷徳堂研究センター『懷徳堂研究』第6号、平成22年2月、張品端「朱熹『白鹿洞書院揭示』の日本における流伝およびその影響」(井上克人ほか編『朱子学と近世・近代の東アジア』、台湾大学出版中心、2013年3月) などがある。

5 『宋史』巻429に「熹幼穎悟。甫能言、父指天示之曰「天也」。熹問曰「天之上何物」？松異之。就傳、授以『孝經』。一閱、題其上曰「不若是、非人也」。嘗從群兒戲沙上、独端坐以指画沙、視之、八卦也」とある。東景南『朱熹年譜長編』巻下「附録」収録。

6 朱子の学問経歴について、陳鍾凡『兩宋思想述評』(東方出版社、1996年) 196～200頁。なお、呉展良「実践與知識：朱熹の早期學術取向析論」(香港城市大学中国文化中心『九州学林』2010年春夏号、同氏「朱子の世界秩序觀之構成方式」(『東亞近世世界觀的形成』、台湾大学出版中心、2007年、265～302頁参照)。

7 鄧洪波『中国書院史』、前出、63頁。

8 白鹿洞書院古志整理委員会整理『白鹿洞書院古志五種』(上・下)、中華書局、1995年。白鹿洞書院新志卷之四・文志一第八、上、45頁。

9 郭斎箋注『朱熹詩詞編年箋注』(巴蜀書社、2000年) 667、677頁にみえる。

10 陸九淵のこの講義が、著名な「白鹿洞書院講義」であり、後に理学家にとつての重要な文献の一つとなる。

11 この五言古詩、鄒元標の次韻詩「独对亭書懷、…」並びに湛若水の「甲子初秋訪白鹿洞」の説解は、植木久行教授のご教示に負うところが非常に大きい。記して感謝の意を表す。